

## 2018年度 入学試験問題

# 国語

## (第4回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

① 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(本文には、一部試験問題用にあらためた場所があります)

① 日本語がよく読めるように、よく書けるようになりたいとすれば、最初にどんなことに気持ちを向けるといいか。

文章は一つ一つの単語で成り立っています。文章はほぐしていくと、結局は単語に達します。単語は建築ならば煉瓦れんがに喩たとえられるでしょう。煉瓦はその一つ一つが同じ形に作られていて、適切に配置されます。煉瓦ならば形が <sup>a</sup> キンイツキンイツですが、文章を組み立てる煉瓦である単語は一つ一つ異なっていて、文章の中でお互いたがに微妙びみょうに応じあいます。だから、まず単語の形と意味に敏感びんになりましょう。

### 練習①

「思う」と「考える」という似た意味の言葉があります。「行くべきだと思う」「行くべきだと考える」のように使います。しかし場合によっては、どちらを使ってもいいというわけにはいきません。例えば、

今夜のごはんの献立けんたてを――

という場合には、「献立を考える」が普通で、「献立を思う」とはいけません。

これにならって、

a ―― を思う (または、―― に思う)

b ―― を考える

と区別して使うのが普通な a と b とを、それぞれ三つずつ書いて下さい。

次に、「思う」と「考える」はどう違うのか、書いて下さい。

「考える」とは理性的な働きで、「思う」とは感情的なものだとみる人もあるでしょう。しかし「入学試験を受けようと思った」という場合には、感情的とはいえないでしょう。

a と b の答えの一例。

a 故郷を思う。はるかなベネチアの都を思う。不満に思う。

b 問題を考える。万が一の場合を考える。段取りを考える。

この場合、どうして「思う」あるいは「考える」の片方しか使えないのか。② 上の甲乙こうおつの図を見て下さい。

まず、上の図のまん中の重なっている部分、これは二つの言葉の意味の重なるところ、二つの言葉のどちらを使ってもよいところです。「私はこうしようと思った」「こうしようと考えた」などという場合は、だいたいどちらを使ってもいい。しかし、「百万円も使ってしまった」と「百万

円を費やしてしまった」とは重なつてはいても、「使う」と「費やす」では重なりが小さく、図の甲に当たる。「思う」「考える」の場合には、重なりが大きく、図の乙に当たる。図のイ、ロという重ならない部分は小さい。しかしイとロとは交換するわけにいきません。このようにイとロとが、小さい場合と大きい場合とがあります。

これから、いくつかの問題を取り上げますが、乙の図のように単語によっては、重なっている部分が大きくて、イとロが小さいものもある。その微妙なところを、言葉のニュアンスといっています。言葉の使い方がいいとか、言葉が鋭く読めるとかいうことは、このイとロとを明らかに意識して区別し、使い分けられるかどうかにかかっています。

では、「思う」と「考える」の違う部分は何なのかを見るために、もう一つ問題を出します。

### 練習②

次の言葉の意味の違いをそれぞれ書いて下さい。

「思いこむ」と「考えこむ」

「思い出す」と「考え出す」

「思いこむ」とは、一つの考えを心にもつたときに、それ一つを固く信じて他の考えをもてないこと。「考えこむ」とは問題に関わって、あれこれとしきりに考えをめぐらして止まらないこと。「思い出す」は、一つの記憶を心の中よみかえらせること。「考え出す」は、あれこれ工夫して新しい考えを生むことです。もつとも「出す」には「始める」という意味もありますから、「思い出す」「考え出す」は「心配だ」と「思い始める」「どっちがいいか」「考え始める」という意味にもなります。

そこで、「思う」と「考える」の違いに戻りましょう。次の言葉の「思い」を「考え」に置き換えることができるかどうか。

思い知らせる

思いとどまる

思い浮かべる

思いおこす

この「思い」を「考え」に置き換えることはできません。なぜできないか。

「思い知らせる」とは、自分の心の中にある一つの気持、恨みとか悪い感情を相手に分からせることです。長い間、自分の心の中に抱いている恨みを相手に知らせるのが「思い知らせる」。

「思いとどまる」とは、自分の胸の中にあつて突っ走ろうとする一つのことを抑えること。

「思い浮かべる」「思いおこす」の「思い」も同じことです。

つまり「思い」とは、胸の中にある一つのことをいいます。これに対して「考える」とは、あれかこれか、ああするか、こうするかと、いくつかの材料を心の中で比べたり、組み立てたりす

ることです。

つまり、「思う」とは、一つのイメージが心の中にできあがっていて、それ一つが変わらずにあること。胸の中の二つあるいは三つを比較して、これかあれか、こうしてああしてと選択し構成するのが「考える」。

(中略)

古い文学の中に出てくる「思ふ」は、「胸の中に思っている」と置き換えるといい例が多い。言葉には出せずに、好きな人を恋する。それを「思ふ」という。胸の中には一人の人の姿しか見えない。それをじつと抱いている。だから「思ひ人」とは、それを告白できないで恋している相手をいいます。「思う」を「感情的だ」ととらえた人は、その点を強く感じたのです。「思う」は胸の中の一つのイメージをじつと大事にしていることですから、「試験を受けようと思う」というときには、そのこと一つを心の中で決めていることです。

それに対して、「考える」にはあれかこれかという比較の観念、あるいは組み立て、構成の気持が含まれている。<sup>③</sup>そのことを書けば、合格です。

(中略)

言葉づかいが適切かどうかの判断は、結局それまでにあった文例の記憶によるのです。人間は人の文章を読んで、文脈ごと言葉を感じます。だから、多くの文例の記憶のある人は、「こんな言い方はしない」という判断ができます。

よい行動をしていきたいと思う人は、よいことをした人の話を聞いて見習うでしょう。同じように、鋭い、よい言葉づかいをしたいと思う人は森鷗外、夏目漱石、谷崎潤一郎とか、現代だったら誰でしょうか、言葉に対してセンスが鋭い、いわゆる小説家・劇作家・詩人・歌人たち、あるいは適切な言葉を使って論文を書く学者、そういう人たちの作品・文章を読んで、文脈ごと言葉を感じるのがよいのです。

骨董の目利きになるためには、よい物を、まず一流品を見続けなければだめだといえます。二流品を見ていては眼がだめになる。文章もそれと同じです。よいと思われるもの、心をひくものを見馴れているうちに、ああ、これは雑だなとか、ここはおかしいとか気づくようになる。自分を引きつけるものはその人にとってよいものなのです。だから、自分を引きつけるものを熟読して、それをいつそう鋭く深く受け取るようにすること。次に、よい文章といわれるものを読んで、どこが違うか、どちらがよいかを自分の目で判断すること。

ときには、<sup>④</sup>「新しい言葉」をつくる人もいます。新しい言葉をつくらうと、現在は <sup>b</sup>ラクゴカや漫才師、あるいはコピーライターがしのぎを削っています。戦後にアジャパーだとかトンデモ

ハッピーだとか、一時は流行する表現がつけられました。その大部分は一〇年もたたずに消えました。それはつくられたものの底が浅かったのです。

久米正雄が「微笑」でもない「苦笑」でもない笑いを表現したいと思って、「微笑」という新語をつくった。この単語は現在、和英辞典にも項目として立っています。これは人間社会にある一つの事実を的確にとらえて言語化したから、社会に存在を認められたのです。「わざと変な言葉」を使うと、その場だけは面白がられたりするでしょう。それと社会で存在権を認められる単語とは別です。

人間の行為・行動に、社会のいろいろな状況に応じて新しい行動が出てくるように、必要から新しい言葉が出てきます。それがいい言葉かどうかを感じる鋭い感覚が必要です。そこで必要なことはまず区別できる単語の数を増やすこと。自分が区別して使える語彙が多くなっては、ぴつたりした表現ができない。

自分の語彙を増やすことに関しては、小説家とか歌詠みたちなどは、みんな非常な苦心をしています。例えば、与謝野晶子とか斎藤茂吉などの歌人は、辞書を読んでいって単語を拾ったようです。井上ひさしさんは、辞書をたくさん買って頭からそれを読むようですし、大江健三郎さんは、あの堅牢な「セイホンの『広辞苑』を三冊取り替えたという噂です。『広辞苑』はそう簡単にはこわれない。だから、大江さんがいかに辞典を引いたか分かります。普通の人間は、せいぜい五、六万語知っていれば多い方でしょう。しかし、彼は二〇万語の日本語を消化しようとしたように見えます。しかも覚えた単語をそのままは使わない。大江さんには『万延元年のフットボール』とか『芽むしり仔撃ち』とか、普通にはない単語の組み合わせがあるでしょう。それは単語そのものではなくて、単語の組み合わせ方において新しくしようとしたのでしよう。

よい言い方、よくない言い方の問題として、「見れる」とか「起きれる」とかの「ラ抜き言葉」が問題にされることがあります。ラ抜き言葉をとがめだてするのも一つの言語感覚です。しかし「見れる」「起きれる」は可能動詞といふべきもので、江戸時代に「書かる」から新たに「書ける」という、古典語にはなかった可能動詞がつけられて、今は普通に行われていることを思えば、日本人の意識には「可能動詞」を欲する根源的な欲求があり、それに応えるように新形ができる。その一環として、「見れる」「起きれる」が数十年前から方言的に生じてきたわけで、それが今や広く使われるにいたった。私はこれを使いませんが、この発達は日本語としては自然な動きで、止めることはできないでしょう。

人の話す言葉のどれが正しいとするかは、なかなかむずかしいことです。それはどこに基準点をおくか、いつの時代、どこの言葉を規準とするかによります。どれが正しいかというところに踏みこむと、保守的な態度の人、新しいことを好む人、いろいろあって、その人の人生や世界に対する考え方が言葉の選択の上に出てきます。<sup>⑤</sup> 今から何千年も昔の楔形文字を解読したところ、

「このごろの若者の言葉づかいが悪くて困る」とあったそうです。言葉は人間の行為だから、保守的、<sup>d</sup> カイシンのという相違があるのは当然です。

私が「単語に敏感になろう」、「違い目について感覚のある人間になりましょう」と言っていることに注意して下さい。言葉をどう使うかは、その人が保守的な態度をとるのか、新しい態度をとるのかによって違う。それはその人その人なのです。これだけが正しい言い方などと簡単にはいえない。<sup>⑥</sup>「言葉の違いに敏感になろう」。鈍感<sup>どんかん</sup>ではだめです。「ちっとも」と「さっぱり」は違うのか、違わないのか。「お客がちっとも来ない」と「お客がさっぱり来ない」とをくらべると、「さっぱり」には店主の期待はずれの感じがあるなど思うか思わないかです。

単語を的確に使うということで、大事なことが一つあります。例えば、「臆病<sup>おくびょう</sup>な人」を「慎重<sup>しんちょう</sup>な人」といったら、それは不的確ということになるでしょう。しかし、「臆病」と「慎重」とではまったく別の言葉で間違えようはありません。不的確な表現になった原因は単語にはなく、事実を見る眼が曇<sup>くも</sup>っているのです。ほんとうは「臆病」なのに、それを「慎重」な態度だというのは、あるいは真実を避<sup>さ</sup>けて表現しているのかもしれませんが。「臆病な政治家」を「あの人は臆病だ」とはつきりと表現するのは、単に言葉に敏感になるだけでなく、事実そのものをよく見る眼と心とが要ることです。はつきり見てきちっと表現する心がまえがなくては、言葉を的確に運用できないのですね。

(大野晋『日本語練習帳』より)

問1 —— 線 a r d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 —— 線①「日本語がよく読めるように、よく書けるようになりたいとすれば、最初にどんなことに気持を向けるといいか」とありますが、このことについて筆者は最初に「単語に敏感になる」という答えをあげています。もう一つは何が必要と述べていますか。文中から十文字以内でぬき出しなさい。

問3 —— 線②「上の甲乙の図」とありますが、この文章の上に本来は「甲」と「乙」の二つの図があります。それぞれの図を考えて解答らんにかきなさい。ただし、範囲<sup>はんい</sup>をあらわす○とイ・ロという部分をあらわす記号を必ず使用して、「甲」「乙」の違いがはっきりわかるように答えること。



問7 — 線⑥ 『言葉の違いに敏感になろう』。鈍感ではだめです。『ちっとも』と『さっぱり』は違うのか、違わないのか」とありますが、筆者は「ちっとも」と「さっぱり」の違いの例を挙げ、何が違っていると述べているのですか。 — 線③より前から八字でぬき出しなさい。



(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

横浜の町に住む「僕」は絵を描くことが好きだった。だが、透き通るような藍色の海と、白い帆前船の船体の水面近くに塗ってある洋紅色が「僕」の持っている絵の具ではどうしても出せない色であった。そこでふと「僕」は同級生の西洋人「ジム」が持っている西洋絵の具を思い出し、その西洋絵の具の美しい藍色と洋紅色がたまたなく欲しいと思うようになりはじめた。

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが体も心も弱い子でした。その上臆病者で、言いたいことも言わずにすますような質でした。だからあんまり人からは、かわいがられなかったし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他の子供たちは活潑に運動場に出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場にはいつていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなって、僕の心の中のようなでした。自分の席に坐っているながら、僕の眼は時々ジムの卓の方に走りまわりました。ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあって、手垢で真黒になっているあの蓋を揚げると、その中に本や雑記帳や石板と一緒に一緒になって、鉛のような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなつたような気がして、思わずそっぽを向いてしまうのです。けれどもすぐまた横眼でジムの卓の方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しいほどでした。じつと坐っているながら、夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に、はいる鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎよつとして立上りました。生徒達が大きな声で笑ったり呶鳴ったりしながら、洗面所の方に手を洗いに付けて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを、<sup>①</sup>気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓の所に行つて、半分夢のようにその蓋を揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり、雑記帳や鉛筆箱とまじつて、見覚えのある絵具箱がしまつてありました。なんのためだか知らないが僕はあっちこちをむやみに見廻してから、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色を取上げるが早いか、ポケットの中に押込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

僕は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のない様子がないので、気味が悪いような安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰ることなんかは耳にはいりははいつても、なんのことだかちつともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕はしかし<sup>②</sup>先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間がた

ちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いつながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心して溜息をつきました。けれども先生が行ってしまったと、僕は僕の級で一番大きな、そしてよく出来る生徒に

「ちよつとこつちにお出で」と肱の所を掴まれていました。僕の胸は、宿題をなまけたのに先生に名を指された時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならないと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅に連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持っていろいろだろう。ここに出し給え」

そういつてその生徒は僕の前に大きく拡げた手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない」と、ついであらめをいってしまいました。そうすると三、四人の友達と一緒に僕の側に来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失くってはいなかったんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くっていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか」と少し言葉を震わしながら言いかえました。

僕はもう駄目だと思つと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤になったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢でもとて叶いません。僕のポケットの中からは、見る見るマールブル球（今のビー球のことです）や鉛のメンコなどと一緒に、二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして、子供たちは憎らしそうに僕の顔を睨みつけました。僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗になるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕はただは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなせしてしまつたんだろう。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなふうに思うと弱虫だった僕は淋しく悲しくなつて来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたつて駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような、憎みきつたような声で言つて、動くまいとする僕をみんなで寄つてたかつて二階に引張つて行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれども、とうとう力まかせに引きずられて、階子段を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとはいいつてもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「おはいり」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋にはいる時ほどいやだと思つたことはまたとありません。

何か書きものをしていた先生は、どやどやとはいって来た僕たちを見ると、少し驚いたようでした。が、女のくせに男のように頸の所でぶつりと切つた髪の毛を右の手で撫であげながら、い

つものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、ちよつと首をかしげただけで何の御用という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴だということを、どうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫く僕を見つめていましたが、やがて生徒たちに向つて静かに「もういつでもようございます」といって、みんなをかえしてしまわれました。生徒たちは少し物足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立つて来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか」と小さな声で仰いました。僕は返したことをすっかり先生に知ってもらいたいので深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだつたと思つていますか」

もう一度そう先生が静かに仰つた時には、僕はもうたまりませんでした。ふるふるど震えてしかたがない唇を、噛みしめても噛みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。よく解つたらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらつしやい。静かにしてここにいらつしやい。私が教場から帰るまでここにいらつしやいよ。いい」と仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉強の鐘がなつたので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這い上がった葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎつて、しくしくと泣きつづけていた僕の膝の上にそれをおいて、静かに部屋を出て行きなさいました。

一時がやがとやかましかつた生徒たちはみんな教場にはいつて、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋しくつて淋しくつてしようがないほど悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと、僕は本当に悪いことをしてしまったと思ひました。葡萄などとても喰べる気になれないで、いつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し痩せて身長の高い先生は、笑顔をを見せて僕を見おろしていられました。僕は眠つたために気分がよくなつて今までであったことは忘れてしまつて、少し恥しそうに笑いかけしながら、慌てて膝の上から這り落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して、笑ひも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしなくてもよろしい。もうみんなは帰つてしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そして明日はどんなことがあつても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を

見ないと私は悲しく思いますよ。きつとですよ」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながら、つまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

④ けれども次の日が来ると僕はなかなか学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門をはいることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの言葉思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといっても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生はきつと悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、先ず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいて、どぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行つたらみんなが遠くの方から僕を見て「見る泥棒の嘘つきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのに、こんな風にされると気味が悪いほどでした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中にはいりました。

「ジム、あなたはいいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまつてもらわなくつてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはぶら下げている僕の手をいそいそと引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといいつてこの嬉しさを表せばいいのかわらないで、唯恥しく笑う外ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤にして「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。

「そんならまたあげましょうね。」

そういつて、先生は真白なリンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取つて、真白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鉢で真ん中からぶつりと二つに切つて、ジムと僕とに下さいました。真白い手の平に紫色の葡萄の粒が重つて乗っていたその美しさを僕は今でもはつきりと思ひ出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあのおい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇えないと

知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた <sup>i</sup>大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

(有島武郎『一房の葡萄』より)

問1 —— 線 i 「多勢に無勢」、ii 「しおれて」、iii 「むやみに」の文中での意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

i 「多勢に無勢」

- 1 多人数の中から強い相手が選ばれ、一人では対処できない
- 2 一人で向かい合うには相手の人数が多くとても抵抗できない
- 3 多人数で向かったが一人を相手になかなか責め立てられない
- 4 一人でいるところをふいに多人数でせまられ処理できない

ii 「しおれて」

- 1 ぼうぜんとして
- 2 静かになって
- 3 怖く感じて
- 4 しょんぼりして

iii 「むやみに」

- 1 前後を考えないで
- 2 度を超して
- 3 とうとつに
- 4 意味もなく

問2 —— 線①「気味悪く思いながら」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ジムの持つ西洋絵の具が欲しくてたまらない「僕」は、昼休みの間、暗い教室でひとり悩みつづけ、体が冷え切っていく一方で、盗みたいという気持がどんどん高まっているのを気味悪く感じているということ。

2 ジムの持つ西洋絵の具が欲しくてたまらない「僕」は、その誘わくのうちかつことができず、理性をはたらかすことができないままに、盗みをおかそうとしてしまっているのを気味悪く感じているということ。

3 ジムの持つ西洋絵の具が欲しくてたまらない「僕」は、盗みは絶対にやってはならないことだと思いつつ、どうすればジムの絵の具をうまく手に入れられるか緻密に計画しているのを気味悪く感じているということ。

4 ジムの持つ西洋絵の具が欲しくてたまらない「僕」は、ジムの絵の具を自由に使えるよろこびを思いながら、そのために自分が盗みをはたらくという考えを打ち消そうとしているのを気味悪く感じているということ。

問3 ——線②「先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした」とありますが、この時の「僕」の気持ちはどのようなものだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 先生はいつもとは違う「僕」の様子をいぶかしげに見ているように思われたが、好きな先生の眼も見られないほどに、後ろめたさを感じている。

2 先生は様子の違う「僕」を心配そうに見てくれているが、「僕」はそれどころではなく、クラスの皆にばれないかどうか恐怖を感じている。

3 ジムの絵の具を盗んだことがばれないのは「僕」にとって心地いいものであったが、大好きな先生にばれてしまったことはたえられない苦痛だと感じている。

4 ジムの絵の具を盗み、「僕」は欲しかった絵の具が簡単に手に入ってしまったという手応えのなさを感じたが、好きな先生には罪悪感を感じている。

問4 ——線③「僕はその部屋にはいる時ほどいやだと思ったことはまたありません」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「僕」は大好きな先生に、絵の具を盗むという卑怯な行為を知られてしまうことで、嫌われなくなかったから。

2 「僕」は大好きな先生に、絵の具を盗むという卑怯な行為を責められ、クラスでの立場がなくなることを恐れたから。

3 「僕」は大好きな先生に、絵の具を盗むという卑怯な行為の詳細を聞かれたら、うそを吐いてしまうと思ったから。

4 「僕」は大好きな先生に、絵の具を盗むという卑怯な行為の言い訳をしたいが、まだそれが思いうかばないから。

問5 ——線④「けれども次の日が来ると僕はなかなか学校に行く気にはなれませんでした」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ジムや「僕」を先生のところへ連れて行った子たちから、昨日なぜ「僕」をもっと追及しなかったのかと先生が厳しい抗議を受けていると思ったから。

2 ジムや「僕」を先生のところへ連れて行った子たちからクラスみんなに「僕」がやったことが伝わっていると、クラスに居場所がないと考えたから。

3 ジムや「僕」を先生のところへ連れて行った子たちから事情を聞いたクラスメイトが、「僕」を励ます様子を想像すると面倒だと感じたから。

4 ジムや「僕」を先生のところへ連れて行った子たちから昨日よりも詳しい説明を先生が受け、「僕」に対する見方が悪い方に変わっていると考えたから。

問6 この本文の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ……線 a 「卓」<sup>テーブル</sup> c 「ポケット」 e 「ノック」などのカタカナ語で、「僕」が西洋にあらがれていることを示し、それを盗みという行為に結びつけている。

2 ……線 b 「赤くなった」 h 「紫色」のような色彩語<sup>しきさい</sup>で、悪いことをした時の焦りや問題が解決し、葡萄をもらった時の安心した気持ちをより強く印象づけようとしている。

3 ……線 d 「しくしくと」 f 「ぶるぶると」という擬音語<sup>ぎおん</sup>によって、人の物を盗んでしまったことへの悲しみや後悔<sup>こうかい</sup>を擬人化<sup>ぎじんか</sup>し、「僕」の複雑な心情を巧みに表現している。

4 ……線 g 「真白い左の手」 i 「大理石のような白い美しい手」という表現によって、大好きな「先生」に対して持っている「僕」の美しい記憶<sup>きおく</sup>を際立たせようとしている。

問7 本文では「僕」の性質の変化が見られます。変わる前と後をあらわしている箇所をそれぞれ二十五字以内でぬき出し、はじめの三字を答えなさい。



(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

「鶴」

村上昭夫

① あれが鶴だったのか  
今になって思えばはつきりと言える

私は失望していたのだ  
日毎の餌にことかかない檻のなかで  
優雅な姿を見せていた鶴のことを

私は随分長い間  
思い違いもしていたのだ  
豊かな陽光のもとに  
あたかもそれが吉祥のしるしなのだと思われ  
舞いあがり舞いおりしている鶴のことを

② だがその いずれの時も鶴は  
それらの認識のはるかな外を  
羽もたわわに折れそうになりながら飛んでいたのだ  
降りることもふりむくことも  
引返すこともならない永劫に荒れる吹雪のなかを

あの胸をうつ鶴の声は  
そこから聞こえていたのだ

(川崎洋『ひととき詩をどうぞ』より)

問1 この詩の表現技法についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 第二連には体言止めが使われている。
- 2 第三連には比喩が使われている。
- 3 第四連には擬人法が使われている。
- 4 第五連には倒置法が使われている。

問2 — 線①「あれが鶴だったのか」について、次の問いに答えなさい。

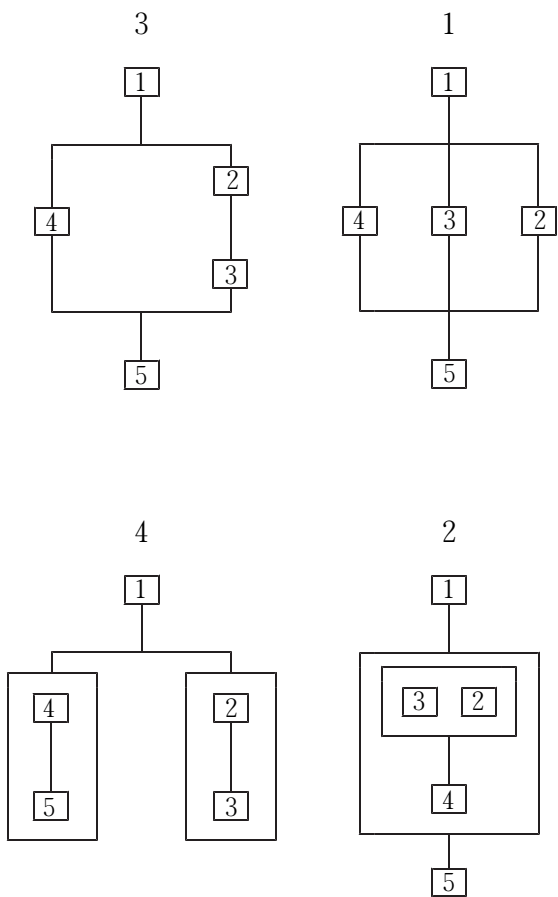
(1) この表現からは、以前に見た鶴がどのような鶴であったことが読み取れますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 姿は美しいものの心にひびくものを感じさせてくれなかった鶴。
- 2 日々の食べ物に困ることもなくいちだんと優雅に見えた鶴。
- 3 檻の中にながら少しもその威厳を失っていなかった鶴。
- 4 他の鳥や獣たちと比べると存在感を感じなかった鶴。

(2) ここでいう「鶴」はどのような状況にいる鶴のことを指していますか。詩の中から五字以内でぬき出しなさい。

問3 — 線②「いずれの時も」とありますが、これらの「時」に作者が感じていたものは何ですか。詩の中から二つ、それぞれ五字以内でぬき出しなさい。

問4 この詩は五つの連からなっていますが、どんな構成になっていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。なお、①～⑤は連の番号を表します。



4 次の各問いに答えなさい。

問1 漢字二字の熟語の読み方には次の四通りがあります。これについて、後の問いに答えなさい。

- 1 音読み + 音読み
- 2 訓読み + 訓読み
- 3 音読み + 訓読み
- 4 訓読み + 音読み

(1) 次のA～Dの熟語は1～4のどの読み方ですか。それぞれ番号で答えなさい。

- A 野原      B 世界      C 客間      D 合図

(2) 3のような読み方のことを、代表的な熟語を使って何読みとよんでいますか。解答らんに合わせて漢字二字で答えなさい。

問2 次のA～Eのことばの意味として最もふさわしいものを後から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- A 漁夫の利      B 鶏口牛後      C 螢雪の功      D 他山の石      E 覆水盆に返らず

- 1 双方が利益を争っているのに乗じ、第三者がその利益を横取りすること。
- 2 規律や統一のない寄り集まりのこと。
- 3 つまらない人の言行でも自分の向上に役立つこと。
- 4 旧習を固守して融通のきかないこと。
- 5 苦労して学問をし、りっぱな人間になること。
- 6 大きな団体の一員になるよりも、小さな団体の長になる方がよいこと。
- 7 多少の違いはあっても本質的には変わらないこと。
- 8 利害をぬきにして極めて親密な交際をすること。
- 9 他人の権勢をかさに着ていばる小人物のこと。
- 10 一度してしまった失敗は取り返しがつかないこと。